病院情報ファイル 2011

# 神田第二クリニック

〒106-0031 東京都港区西麻布3-20-14梅田ビル２Ｆ ☎03-3402-0654

間壁さよ子院長

# 子宮体がんの検査

## 未産や肥満などによる高エストロゲン環境が影響。検査は超音波やMRIが充実している。

取材・構成 恵原真知子

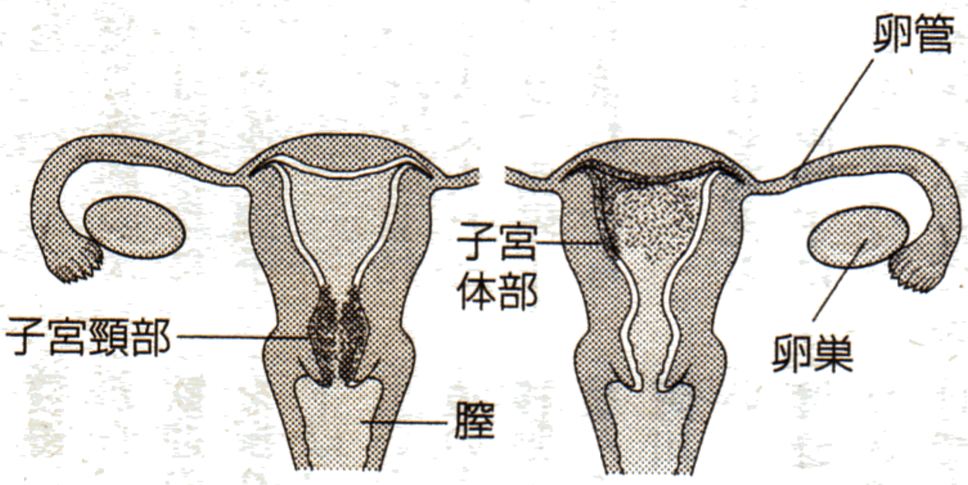
子宮体がん（子宮内膜がん）が増えている。一九七〇年代には子宮がん全体の一割以下であった体がんが、今や三割以上に急増。高齢化が一つの増加要因であるとしても、近年は四十代の発症も増え、四十歳以下の発症も稀ではないという。

晩婚化や未産、肥満などの影響が大きいといわれるが、その因果関係と、合理的な検査法などを中心に、神田第二クリニックの間壁さよ子院長にきいた。

「子宮は小ぶりの鶏卵大で、発生部位により子宮体がんと頸がんに分かれます。体部の内膜から発生するのが体がんで、体がん全体の約九五％を内膜がんが占め、残りが筋肉から発生する子宮肉腫です。したがって、体がんと言えば内膜がんと考えて下さい」

子宮体がんは比較的予後が良く、体がん全体の五年生存率は八〇％を上回っている。ラッキーなことに、危険信号の不正出血（正確には不正性器出血＝月経以外の、性器からの出血）が殆どの患者に認められ、それを機に診断が確定した場合でも六割が早期段階にあるという。逆に言えば、不正出血があれば受診を最優先せよということだ。

現在、公費補助のがん検診からは除外されている場合が多いが、一般的に内膜の細胞を採取して顕微鏡で調べる細胞診を行い、結果が疑わしい場合は子宮内膜組織検査が採用される。確定診断には不可欠だが、苦痛が大きく、医師にとっても技術を要し、時間もかかるわりに診療点数は低いなどの難点がある。




子宮頸がん　子宮体（内膜）がん

間壁院長は、経膣超音波検査を優先。それで内膜が薄ければ（正常）、細胞診の必要性が低い旨を伝え、それでも希望する人やがん家系の人には内膜細胞診を実施。その結果に疑いがあるか、子宮が小さく細胞診が無理なときなどは連携病院放射線科にＭＲＩ検査を依頼する。

「この手順でほぼ過不足ない結果が得られ、最近では麻酔下に行う内膜全面掻爬（そうは）検査も殆どなし。ともあれ検診の持続には苦痛の軽減が重要だと思います」

### ピルは体がん抑制に繋がる

未産との因果関係については、どうなのだろう。

「体がんはホルモンの影響を受けやすく、エストロゲン（卵胞ホルモン）は促進方向、プロゲステロン（黄体ホルモン）は抑制方向に働きます。プロゲステロンは妊娠中にたくさん分泌されますが、未妊や少産ではその恩恵を受けにくい。また、閉経後でも脂肪細胞の中でエストロゲンが造られるものの、排卵がなくプロゲステロンは出ないため、高エストロゲン状態を招きます」

このようにエストロゲンだけが増えるような条件と重なって、体がんを増やす温床となっているのだ。

女性にとって妊娠・出産は、時に命懸けの大仕事となるが、一生涯のホルモンコントロールにも一役買っているわけだ。が、だからといってがん対策として妊娠を望む人もいないだろう。

「避妊用低用量ピルはまさに擬似的妊娠状態をつくります。避妊用として使ってきた方はもちろん、生理不順や子宮内膜症などの治療で使った方も、期せずして体がん抑制に繋がっているはずです」

お産難民で注目された産婦人科系の窮状は今も変わらない。がん治療も地域中核病院に集中しているので、検診などは実力ある診療所を頼るのが合理的だが、そこも混み合っている。診療時間は十分が限度と考え、受診前にパンフや一般書などを読み予備知識を蓄えよう。この分野は進歩が著しいので常に情報の更新を！